

令和7年度
岐阜大学地域科学部
特別選抜試験

小 論 文

問 題 冊 子

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、表紙を除いて12ページあります。問題は2つの大問から構成されています。
- 3 問題冊子とは別に、解答用紙が4枚あります。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁および解答用紙の汚れなどに気がついた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答用紙には、解答欄以外に受験番号欄があるので、正しく記入してください。
- 6 問題冊子の下書用紙及び余白は、適宜利用して構いません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

I (配点比率 50%)

次の文章は、除本理史・佐無田光『きみのまちに未来はあるか？―「根っこ」から地域をつくる』(岩波書店、2020年)、156-164頁(一部改変)の一部です。文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

地域には「価値」がある

これまでの各章では、地域と関わって暮らし、「根っこ」を育てようとする人たちを地域ごとに紹介してきました。いずれの章にも共通していたのは、地域には多くの人が大事に思う「価値」がある、ということです。この価値は地域の「根っこ」と深く結びついています。これを私たちの未来に活かしていくにはどうすればよいか、考えてみましょう。

(中略) 2011年3月の東日本大震災と福島原発事故によって、(a)地域の「価値」の大切さが私たちの目の前に突きつけられました。原発事故の被害は、住民の健康・生命や財産を損なっただけでなく、他のものでは代替できないような「ふるさとの喪失」をふくんでいました。普段の暮らしのなかで当たり前のように享受していても明確に意識していなかった価値が突然奪われたために、「地域の暮らしには価値がある」ということが強烈にクローズアップされたのです。

ローカルな意識が喚起されたのは、原発事故の直接的な被害地域だけにとどまりません。各種アンケートの結果によれば、震災後、「絆」や「地域」に重きをおく人びとが増えたといわれています(たとえば、内閣府経済社会総合研究所「第二回あなたご自身に関する調査」2011年、参照)。

このような変化は、人びとが地域の「根っこ」を見つめなおそうとしていることのあらわれです。「地域と関わる」という新しいライフスタイルへの関心が高まっているのです。これは、地域発展にとって大きなチャンスでもあります。しかし、(中略)地域の「消費」が行きすぎると、過度な観光地化や不動産開発など、さまざまな弊害をもたらします。地域の「根っこ」を破壊することにもなりかねません。

地域の「根っこ」を育てるために、このチャンスを活かすという考え方が大切です。地域の歴史をきちんと踏まえながら、未来をひらくというバランス感覚が求められるのです。そのためにはどうすればよいでしょうか。

「モノづくり」から「コトづくり」へ

20世紀の経済における一つの特徴は、規格化された画一的な商品を大量に生産・消費してきたことです。それにともなって、地域の固有性も失われていきました。地域それぞれに、歴史や風土に根ざした多様な暮らしがあったのですが、近代的な開発のもとでどんどん失われてい

ったのです。

しかし現代では、そのような経済の仕組みは行き詰まり、これまで失われてきたものが見直されるようになっていきます。人びとはこれ以上「モノ」の量的な豊かさを求めるのではなく、それによって得られる「知識」や心温まる「感動」といった無形の要素を重視するようになりました。このようなニーズの変化は、従来の経済活動や価値に対する考え方を大きく変えています。

たとえば「モノ」の機能は変わらなくても、あるいは時間がたつて劣化したとしても、そこに「意味」や「物語」(ストーリー)が加わることで価値が大きくなります。芸術作品がわかりやすい例ですが、時間がたつと「モノ」としては劣化しても、歴史的な評価に耐え、生き残ることでむしろその価値は高まります。これは、作品というモノそれ自体ではなく、そこに与えられた「意味」が価値の根拠になっているためです。モノの「意味」が深まって、見ている人の知識や情動が高まれば、それにしたい価値も増加するのです。

従来の経済の常識では、労働を投下して、新しい財やサービスをつくりだすことによるのみ、経済的価値は生まれるとされていました。ところが、何ら新しいものを生産しなくても、すでにあるものに対して「意味」を与えることで価値が高まるのならば、経済活動の様相は一変します。そのため、(b)現代では「モノづくり」だけでなく、「コトづくり」(ストーリーの生産)が重要になっているといわれます。

もちろん、見えるもの、ふれられるものがあるからこそ五感は刺激されますから、「コトづくり」の時代に入っても「モノづくり」の重要性は失われません。大事な点は、そこに知識や情動、倫理や美しさといった無形の要素がどれだけあるかです。

「限界費用ゼロ社会」という表現があるように、すでにあるモノをコピーしたり増やしたりする生産は、デジタル化などの技術によって、限りなく費用ゼロでできるようになりつつあります(ジェレミー・リフキン『限界費用ゼロ社会—モノのインターネット』と共有型経済の台頭』NHK出版、2015年。「限界費用」とは経済学の用語で、生産量を一単位増加させたときにかかる追加的費用のこと)。農業にせよ工業にせよ、規格品をたくさん生産するだけでは、値段を安くしていく価格競争に追いこまれてしまいます。

しかしたとえば、技術や知識をもった職人が、厳選された材料から精巧で美しい製品を生み出したならば、その製品はモノそれ自体にとどまらず、他にはない真実のストーリー、固有性を備えるでしょう。そこでは「ストーリー」のほうが主であり、「モノ」はその媒体になります。「コトづくり」の重要性が説かれるのは、このようにモノにどんな「意味」を付け加えるかが大事だからなのです。

(中略)

「根っこ」を大事にした地域づくり

本書の金沢の事例で見たように、都会では薄れてしまったローカルな要素——人とのふれあい、近隣で協力しあうコミュニティ、余裕のある時間や空間、山や海など自然環境への近さ、風土に根ざした衣食住の慣習、歴史を感じるまちの風景、伝統を醸す職人的なものづくりなど——が再評価され、地域に「価値」を与えています。たとえ新幹線が開通しても、これらが無い金沢では、その効果は長つづきしなかったでしょう。

地域のリノベーションとは、地域固有の自然や景観、伝統、文化、コミュニティなど、暮らしの豊かさを支える「根っこ」の意味を再評価し、地域の資源とすることを意味します。地域住民から見ると、ありふれていて身近な物事かもしれませんが、その歴史的・文化的な意義を知り、新しい面白さを発見することが重要です。全国各地でおこなわれている「地域おこし」や「まちづくり」は、この意味づけ（意味の再評価）によって「地域の価値」をつくろうとする運動だといえます。「地域の価値」が、地域内・外の人々の共感をあつめれば、それだけ多くの人が訪れたり、移住したりすることにもつながります。

人びとに真の感動を与えるには、そこに「本物」がなくてはなりません。「根っこ」とは、その地域で人びとが生きてきたことの積み重ねです。歴史や自然や社会と一体になった人びとの知恵の結晶です。過去からの継承こそが価値を高めます。

とはいえ、「根っこ」は地域の人びとにとっては当たり前すぎて、認知されていない場合もあります。(中略) 能登のケースのように、子どもや孫たちに対して「ここには何もないから大きくなったら都会に行ったほうがよい」という価値観を刷りこんできたという話は、他の地方でもよく聞きます。

普段は認識されていない「根っこ」の価値をわかりやすく抽出するためには、どうしたらよいでしょうか。それには、能登の「まるやま組」の活動や「金沢らしさとは何か」の議論のように、地元の人や専門家と一緒に地道に学習するプロセスが必要です。「意味づけ」が価値を高める時代になったからこそ、漠然としていた「地域の価値」を言葉にしたり、デザインしたりして、それを共有していく人びとのネットワークが意義をもちます。

金沢の事例でのべたように、観光に利用できるわかりやすいアイコン的な「文化」や「景観」が大事なのではなく、その背後にあるもの、まちの個性や時代の変化にあわせて市民が意識して磨きつづけてきた「都市格」(注1)(中略)こそが、都市の文化の「根っこ」にあります。もちろん新しい取り組みを排するのではなく、むしろ過去から継承してきたものに対して、現代的に磨きをかけていくことが求められます。それが地域の「根っこ」を育て、豊かにしていくことにもつながるのです。

注1：経済学者の宮本憲一が、人に人格があるように都市には「都市格」があると論じた。これは特に定義されていないが、本書では、人格を磨くというように、都市格もそのまちの個性や時代の変化に合わせて市民が意識して磨き続けるものであるとされる。

問1 下線部(a)の地域の「価値」とは何か、本文中の言葉を用いて説明しなさい。(200文字程度)

問2 下線部(b)で重要だと言われている「コトづくり」は、今日の「まちづくり」や「地域おこし」とどのようなかかわりを持つのか、筆者の見解をまとめた上で、「まちづくり」や「地域おこし」に何が求められるのかについてあなた自身の考えを説明しなさい。(400文字程度)

下書用紙 (2)

I 問2

(400字程度)

	5	10	15	20	
					(100字)
					(200字)
					(300字)
					(400字)

II (配点比率 50%)

次の文章は、清水晶子『フェミニズムってなんですか?』(文藝春秋、2022年)、111-120頁(一部改変)である。文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

新型コロナウイルス感染症が拡大した2020年から、ケア労働の重要性があらためて見直されています。医療関係だけでなく、介護施設、幼稚園や保育園から小中学校の教育機関まで、ケア労働に従事する人たちの存在なくしては、私たちの社会が機能しなくなることをひしひしと実感した人たちは多かったのではないのでしょうか。医療従事者や介護関連の仕事をしている人たちは過酷な労働条件のもとで、感染の多大なリスクにさらされ続けながら働いています。学校や保育園が閉鎖されると、子どもの面倒を見るために仕事をやめざるをえなくなって経済的困難に直面する人たち(多くは女性)がいます。ケアは社会の基盤である仕事なのです。

ケア労働にたずさわる人たちを「社会に欠かせない重要な仕事をしている人たち」という意味をこめて「エッセンシャル・ワーカー」と称する報道も目立ちました。ところが称える一方で、ケアにたずさわる人たちがその労働の過酷さに見合った報酬や待遇を得ているとはとても言えず、社会的な保障さえも十分ではないことが、感染拡大が長期化する中でいっそう鮮明に浮き彫りになっています。

家庭内での無償労働=ケアだった。

パンデミックにおいて「エッセンシャル(絶対に欠かせない)」とされたケア労働は、にもかかわらず、長いことその価値が低く見られてきたのです。これを問題視する声もあげられてきましたが、いっこうに改善される気配はありません。その理由の一つに、育児や介護、さらに食事を用意したり家を整えたりという日常の家事などのケア労働全般を、女性が担わされてきたことがあります。

ケア労働はそれに対して報酬が支払われるべき「仕事」ではなく、「女性の領域」とみなされた私的領域において女性たちが自然に担う役割である、と位置付けられてきたのです。このように再生産労働を女性たちだけに担わせることは、女性を公的領域から排除するだけでなく、私的領域においても男性の支配を強めている、とフェミニストたちは指摘してきました。さらに、労働力を再生産する仕事に対価を支払わずに済むこの仕組みは、資本主義社会にとっても大変に都合の良いものでした。

もちろん、中・上流階級の家では家の「女主人」が直接にケア労働をするのではなく、ケア労働の監督者としての「女主人」のもとで人種的マイノリティや労働者階級の人々が非常に安価な報酬で(奴隷制のもとでは無償の)家庭内労働に従事する、という構造が成立していました。そして、女性の社会進出が進んで女性たちが「家庭の外」で仕事をして収入を得るよう

になり、家庭内のケア労働が少しずつ外部化され有償化されていったときも、ケア労働の報酬が安価なものにとどめおかれ、しばしば移民や人種的マイノリティなどに振り当てられる状況は、変わりませんでした。ケア労働は誰かが担わねばならない重要なものであるにもかかわらず、私たちの社会はケア労働の価値を正当に認め、ケアをする人に敬意を払って労働に見合った報酬を支払う、ということをしてこなかったのです。

(中略)

西洋近代社会は、「経済的、身体的、社会的に自立／自律した（していると自認している）個人」である市民をもとにして社会と制度とを設計してきました。この時、モデルとなる「個人」を存在可能にするために必要とされるケア労働の存在は、視野から排除されます。

その「個人」は誰にも頼らずに存在しているはずで、したがって自分以外の誰かから何らかのケアをしてもらう必要があるはずがない。とはいえ、もちろん、人間は誰でも産み落とされ、育てられる過程でケアをされてきたわけですし、その後も、たとえば日常生活を送る上で食事を作ってもらっていたり、住居を整えてもらっていたり、着るものを清潔にもらっていたりする。

だから、誰の世話も支えも受けずに自立／自律している個人、というのはただの幻想に過ぎないのですが、その幻想を維持するために「自分は他の誰かにケアされ、支えられているのだ」という事実を否認してしまう。

ケアを必要としない個人、という幻想。

そして、そのような「個人」の幻想に合致しない人たち——経済的に「自立」していない女性、障害や病気を持っている人、高齢者や子どもなど——は、「不完全な、あるいは不十分な人間」と見做されるようになっていきます。「自立／自律した個人」は、その幻想を守るため、「ケアを受ける」可能性を自分から切り離してそのような人々に集中して投影するのです——ケアを必要とするのはそういう「不完全な、あるいは不十分な人間」たちなのだ、と。ケアは社会の存続のために欠かすことのできない労働ではなく、そのような「自分で自分の面倒を見られない人」に対する「思いやり」とか「同情心」とか「やさしさ」とか、場合によっては「母性」とかの「女性の自然な特性」の発現に過ぎない、というわけです。

このような理解のもとでは、ケア労働の価値は正当に評価されませんし、同時に、「ケアを必要とする」ことになっている人々が「人間未満」であるかのような不当な扱いを受けたり、蔑視や支配にさらされたりするリスクも高まります。

どう変えていけばいいのか？ まず、私たちは誰もが生まれてから死ぬまで、外部からのケアを受け支えられて生きている、ということを読めるところから始めるべきではないでしょうか。

(中略) 冒頭で、新型コロナウイルスのパンデミックのもと、その必要性和、同時にその待遇の不十分さがあらためて注目されているケア労働として、医療や介護、あるいは保育や教育などをあげました。そこで「ケアをされる」側としてまず想定されているのは、病気にかかった人、障害のある人や高齢者、あるいは子どもたち、ということになるでしょう。けれどもここで、「エッセンシャル・ワーカー」と呼ばれた人たちが誰だったのかを、もう一度考えてみてください。

もちろん、そこには医療や介護従事者、保育園や幼稚園、学校の先生たちなどが含まれていました。けれども「エッセンシャル・ワーカー (欠かすことのできない重要な労働に従事する人たち)」には、たとえば公共交通機関を動かしている人たち、医療用品から日用品、食料までの運送や配達の仕事に携わる人たち、スーパーマーケットで商品を並べたりレジを打ったりする人たち、公共の場の清掃やごみ収集に携わる人たちも、含まれてははずです。

これらの「エッセンシャル・ワーク」もまた広い意味でのケア労働です。それはつまり逆から見れば、私たちは誰もが、たとえ自分の身の回りの面倒は自分で見られる若く健康な成人であったとしても、日々の生活を送るためには常に誰かに支えられ、ケアされている、ということになります。

誰もが常に、ケアされている。

この地球上に誰一人として、支えや世話を受けることなく生きている人はいません。私たちが生活物資や食料を手にするためには、それを生産して、運んで来て、販売する人たちが必要です。直接にそのような関わりがなくても、例えばグローバルに見た時に「先進諸国」の私たちの生活はしばしば、それ以外の地域で安価に発掘された資源やつくりだされた製品に支えられています。

(中略)

私たちの誰もが他の人々からのケアと支えを必要としているのであれば、「エッセンシャル・ワーク」に従事する人々、ケアを提供する人々が生き延びることは、私たちにとって文字通り最重要課題であるはず。私たちが狭い意味でのケア労働に携わっていようとそうでなかろうと、私たちは私たちにケアと支えを提供している人々をケアし、支えなくてはならない。ケア労働を奪取し、過酷な労働条件を放置することは、ケア労働に携わる人々はもちろん、そうではない人々をも含めた、私たちみな生存を脅かすことになるのです。

- 問1 本文によれば、西洋近代社会ではどのような市民がモデルとされてきたか。またそのモデルにはどんな問題があるか。著者の考えを要約しなさい。(200字程度)
- 問2 下線部「ケアにたずさわる人たちがその労働の過酷さに見合った報酬や待遇を得ているとはとても言えず、社会的な保障さえも十分ではない」とあるが、この問題を解決するにはどうすればよいか。著者の考えを要約したうえで、あなた自身の考えを説明しなさい。(400字程度)

